

閉会の挨拶

益 田 朋 幸

Closing Comment

Tomoyuki MASUDA

私はビザンティン美術という分野をやっておりまして、漱石とは関係がないのですが、それでも漱石の作品の中に、私が専門にしておりますビザンティン帝国に関わる場所が一つあると思っています。

お気づきの方もいらっしゃると思いますけれども、『吾輩は猫である』の中で、苦沙弥先生が泥棒に入られて、奥さんに腹を立てて「オタンチン・パレオロガス」っていうふうに罵るんですね。注を見ますとだいたい、東ローマ帝国、あるいはビザンティン帝国の最後の皇帝コンスタンティン・パレオロガスの地口、もじりだということになるのですが、これをちょっと私の立場からもう少し考えてみると、ビザンティン帝国というのは、中世、4世紀から15世紀まで千百年間にわたって続いたキリスト教の一大帝国です。初代にあたる4世紀の皇帝が、コンスタンティヌス大帝です。この人は、キリスト教を公認して、今までのローマ帝国の古い都ローマをコンスタンティノープルに移しました。

その後に続くビザンティンの皇帝たちは、このコンスタンティヌス大帝にあやかろうと同じ名前を好んで付けました。ですから、千百年の間に、コンスタンティヌスという名前を持つ皇帝が合計11人現れました。そのいちばん最後、11番目の皇帝が、コンスタンティヌス11世パレオロガス、英語読みでコンスタンティン・パレオロガスです。この人のときに、ビザンティン帝国はオスマン帝国、トルコに敗れてついに滅亡するということになります。

コンスタンティン、オタンチンという地口をやるのであれば、コンスタンティヌス大帝を出してもよかったのですが、あえて知名度の低い15世紀の皇帝をあえて漱石が使ったのはなぜでしょうか。私の立場から言えば、二つ解釈の可能性があるのではな

いかと思います。

一つは、漱石が当時のヨーロッパ的なイスラーム観を持っていて、せっかく千百年続いたキリスト教の国をイスラーム教徒の手に渡してしまったこのオタンチン、と罵ったのだという可能性です。

もう一つはやや深読みが過ぎるかもしれませんが、当時の明治日本の状況と重ね合わせる可能性です。同時代のギリシア、すなわち近代ギリシアは、四百年間オスマン・トルコに支配され、19世紀初頭によりやうく独立を果たします。しかし漱石が『猫』を書いた20世紀初めの時点では、まだ北部ギリシアはオスマン帝国の支配下にあつて、独立を勝ちとろうと一所懸命にもがいていた。ギリシアの独立は、ヨーロッパ列強の思惑の中で実現しました。小国ギリシアが大国に翻弄される運命と、明治日本の運命を重ねつつ、漱石は最後のビザンティン皇帝に対して愛惜の念を込めて「このオタンチン」というふうと呼んだのかなという気もしなくはない、これは私の勝手な妄想であります。オタンチンは、本気の悪口ではない、愛情のこもった罵り言葉ではないでしょうか。

本日は私ども総合人文科学研究センターにとって1年間最大の催しが、かくも成功裡に終わりました。登壇者の皆様、あるいはご参加者の皆様に、本当に御礼を申し上げます。この国際シンポジウムの結果は、人文研の研究誌『Waseda RILAS Journal』というウェブ雑誌に掲載されます。ちょうど今秋、関東平野の紅葉が色づく頃でしょうか、本日のシンポジウムの結果が公になると思いますので、その頃また皆様には、ホームページを見ていただいて今日の一日を振り返っていただければ幸いです。本日は本当にありがとうございました。